

各関係機関長 様

高知県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予察特殊報第3号を送付します。

平成21年度病害虫発生予察特殊報第3号

1. 病 名 キュウリ退緑黄化病

2. 病原ウイルス ウリ類退緑黄化ウイルス Cucurbit chlorotic yellows virus ; CCYV

3. 発 生 作 物 キュウリ

4. 発生経過

平成21年11月下旬、高知県内の施設キュウリほ場において、葉に退緑・黄化する症状が確認された。高知県農業技術センター及び病害虫防除所でRT-PCR法により検定した結果、CCYVによるキュウリ退緑黄化病であることが確認された。本県のキュウリにおける本病の発生は、現在までのところ約6haで確認している。

なお、本県ではこれまでに施設メロンで本ウイルスによるメロン退緑黄化病が発生しており、平成21年11月4日にメロン退緑黄化病に関する特殊報を発表した。

5. 他県での発生

平成16年に熊本県、佐賀県、大分県、宮崎県のキュウリ、メロンにおいて葉の黄化症状が確認された。当初はタバココナジラミバイオタイプQの吸汁加害による異常症とされていたが、平成19年に(独)九州沖縄農業研究センターがクロステロウイルス科クリニウイルス属の新規ウイルスを検出し、本ウイルスがタバココナジラミによって媒介されることを確認したため、本症状がウイルス病であることが明らかとなった。

本病は、平成21年12月時点で九州全県、埼玉県、茨城県、群馬県、栃木県、広島県、愛媛県で発生が確認され、特殊報が発表されている。

6. 病 徴

キュウリでは、発病の初期には、葉に退緑小斑点が生じ、斑点が増加・癒合しながら黄化、拡大して斑状の黄化葉となる。症状が進展すると、葉脈部分を残して葉の全面が黄化する(図1~5)。また、本病と黄化えそ病との混合感染も確認されている(図5)。

本県で多いつる下ろし仕立てによる長期栽培では、摘葉を頻繁に行うため、顕著な病状が認められる前に罹病葉が除去され感染の判断が困難な場合が多い。また、時期によっては要素欠乏葉や整枝遅れによる老化葉との区別が付きにくい場合もあるので注意する。

本病害による被害としては、葉が黄化し葉縁が下側に巻く症状(図3)が見られ、徐々に草勢が低下して収量が減少するが、果実への症状は今のところ確認されていない。

7. 伝染方法

本ウイルスは、タバココナジラミバイオタイプQ及びバイオタイプBが媒介(半永続伝搬:ウイルス媒介能力が数時間から数日間持続される)することが確認されている。

また、経卵伝染、汁液伝染、土壌伝染および種子伝染はしないと考えられている。

8. 感染植物

現在までに感染が確認された作物は、キュウリ、メロン、スイカである。

また、雑草ではオランダミナグサ(ナデシコ科)及びクワクサ(クワ科)で感染が確認されている。

さらに、接種試験ではキュウリ、メロン以外のウリ科、ナス科、アカサ科など、広範な植物に感染することがわかっている。

9. 防除対策

(1) 育苗期からの薬剤防除などにより苗から本圃へのタバコナジラミの持ち込みを防ぐとともに、ジノテフラン粒剤などの定植時処理など低密度時からの防除を徹底する。特に、定植直後の感染は大きな被害につながるため、この時期の対策を重視し、サンマイルフロアブルやベストガード水溶性などで早めに防除する。なお防除の際は、薬剤抵抗性発達回避のため同一系統薬剤の連用は避ける。

(2) 施設開口部への防虫ネット(1mm目以下(0.4mm以下が望ましい))被覆、黄色粘着シートや近紫外線カットフィルムの利用など、成虫の侵入防止と密度低下に努める。

(3) タバコナジラミは多くの植物に寄生するので、ほ場内及び周辺の雑草は除去する(播種、定植前から実施)。また、施設内へは作物以外の植物を持ち込まない。

(4) 発病株は伝染源となるため、発見次第直ちに抜き取り、ビニル袋などに入れて完全に枯死するまで密閉処理する。

(5) 栽培終了時に施設を密閉してタバコナジラミを死滅させ、施設外への飛散を防止する。



図1: 中位葉での退緑・黄化症状

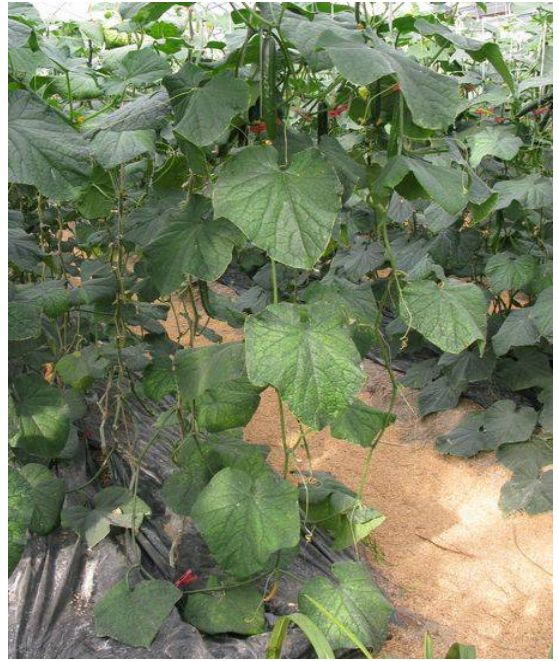


図2: 複数の葉に発生した退緑・黄化症状

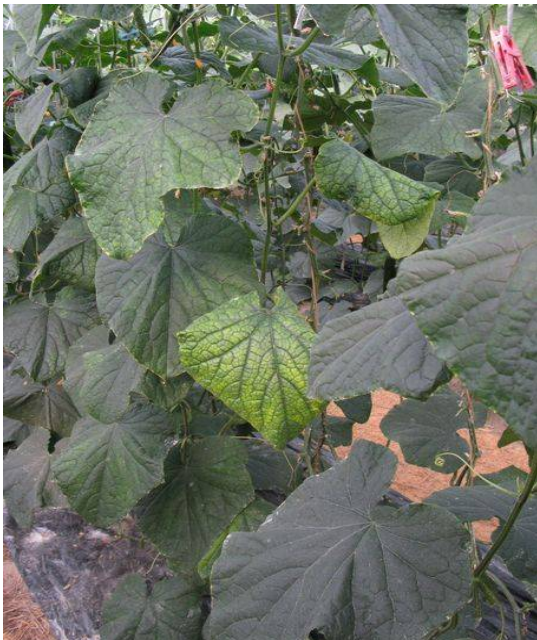


図3 : 葉縁が下に巻く症状を呈した黄化葉



図4: 葉の退緑小斑点症状

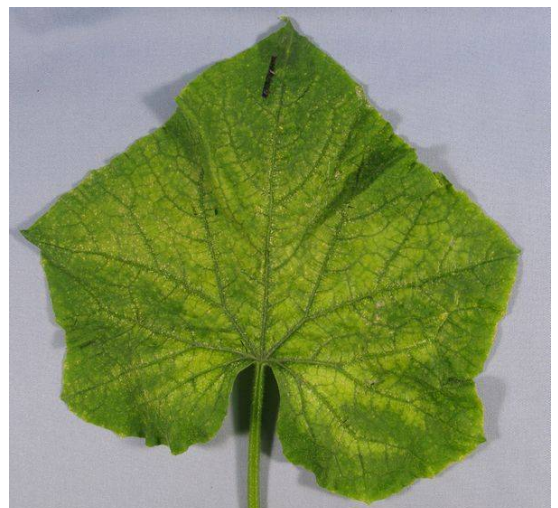


図5: CCYVとMYSVとの複合感染葉